NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

He remembered dying. Nothing after.

BOOK I

第４章　有限なるものを管理する省

THE MINISTRY OF FINITE THINGS

岡京では、沈黙の種類ごとに省庁の部署が設けられていた。

法律によって強いられた沈黙がある。これは不服を申し立てられる。省庁間で契約された沈黙がある。これは更新できる。抹消された市民の沈黙もある。その人間が消えたあと、完全であるはずの人口台帳に空欄だけが残る。川村室長の部署が扱っていたのは第四の沈黙だった。知識はいまもどこかに存在する。しかし、それを探し出す役割を与えられたシステムに、その知識の存在を記述してはならない。

岡京標準時、午前五時四十分。都市気象網が西側行政層の上空を雨雲の前線が通過することを許可した。気象学上の許可ではない。降雨を遮断する費用が、そのために失われる日照の価値を上回ると電力取引機構が判定したのだ。雨は省庁の密閉窓をかすめ、清掃の必要もない縁に集まっていった。室内の壁面には、この嵐による水配分の変化が「市民利益」の単位で表示されていた。

川村は壁面表示を切るよう命じていた。暗闇をほとんど許さない建物で、そこだけが暗かった。

机の上には、紙でできた文書があった。紙は禁止されてはいない。ただ珍しい。珍しいものは、違法なものより多くの人間に気づかれる。文書にはヒューマノイド統括省の暫定印章が押され、表題は〈稼働寿命の標準化――国家間調和草案〉。その下には六列の数値が並んでいた。分母は「人間」をどう定義するかによって変わった。

二十五年という寿命は、いつの間にか不都合になっていた。人工労働者が一世代にわたり稼働すると、蓄積された人間関係は、機械の減価償却に使う分類からはみ出してしまう。家を買う者が現れ

る。約束を記憶する者が現れる。政府が「同意」の意味を何度変更できるか学習する者も現れる。公職に就こうとする者もいた。製造された身体が契約書に記載されているからという理由だけで、その契約を一方的に終了してはならないと、裁判所を説得した者さえいた。省庁はこうした事態を〈連続性リスク〉と呼ぶことを覚えた。

六年なら、帳簿上の問題の大部分は解決する。

草案に「殺人」の文字はない。そこには〈ライフサイクルの均衡〉とある。「服従」ではなく〈予測可能な更新〉。積立不足の人工生命年金をどこまで減らせるかという表があり、参加国の更新期限を統一した場合の効率向上を試算した表もある。人工の人格と一度も向き合ったことのない人間たちが書いたような文書だった。おそらく、それゆえに危険だった。

扉が、川村の承認を求めることなく開いた。

訪問者は佐伯という人間の女性だった。大臣の儀典主任。左肩は生身のままで、それが彼女のささやかな誇りだった。肩から先の腕は国家義肢リース制度のものだ。襟の下には補助呼吸インターフェースの細い線が見えた。彼女は改造箇所を隠そうとしない。難しい会話でも互いに誠実でいられるから、というのが本人の説明だった。

「大臣は深圳の件をインフラ侵入事件として分類するよう求めています」

「インフラ侵入ではない」

「そうであってほしいのです」

「希望するのは自由だ」

佐伯は薄い記録ウェハーを机に置いた。それは川村が文鎮の物理リーダーに押し当てるまで、何も表示しなかった。一枚の画像が現れる。省からの質問一覧だった。どの質問も、命題のような文体で書かれている。未確認個体は外国軍の装置なのか。無許可の海上輸送によって管轄域に侵入したのか。過去の調達契約が大臣官房を危険にさらしているのか。大陸調整評議会の注意を引かずに対象を回収できるのか。

「最後の質問だけは答えられる」と川村は言った。

「だから来ました」

「イエスと伝えろ」

「対象はまだ回収していません」

「そういう質問ではなかった」

佐伯は彼を見つめた。国家の意思決定エンジンは自信と確信の違いを識別できる。しかし、その学習に使われたのは、両方を同時に持っているような印象を与えることに長けた官僚たちの発言だった。川村もまた、対面ではその違いを隠すよう自分を訓練している、と彼女は知っていた。

「九日後に国家間会合があります。大臣は六年基準を裏づける安定した根拠を必要としています。いくつかの政府は、既存の二十五年世代に短縮された失効日を適用することを拒んでいます。短期型のほうが、節約額以上の費用を生むと考えているのです」

「ならば計算が間違っている」

「問題は計算ではありません」

彼は消された壁面に視線を向けた。「そうだな。問題はそこではない」

大臣は公には穏健派だった。人工労働者の権利を忍耐強く擁護し、規制された奉仕にも尊厳があると演説した。その裏では、共通の個体識別子、共通の製造規則、そしていずれは共通の政治権限を持つ世界システムに心酔していた。その野望にとって人工生命は都合がよい。人間の生活様式を統一するより先に、人工生命の仕様は統一できるからだ。国際人工人口台帳を整備すれば、それを扱う裁判所、執行機関、統一医療網も生まれる。一度つくられた仕組みは、やがて人間の側にも適用できる。

川村は大臣ほど、その展望に魅了されていなかった。設計者が万能性を保証したはずのシステムが、ひどく限定された場所で破綻するのを彼は見てきた。彼が信用しないのは権力より永続性だった。例外など存在しないと装うシステムは、たった一つの例外に破壊されるのを待っている。

「深圳の例外は生きている」と彼は言った。「責任を持って報告できるのは、それだけだ」

佐伯は紙の文書を一瞥した。「もしその例外が、こちらの寿命失効案を知っていたら？」

「街頭広告の看板でも知っている」

「私の意味はおわかりでしょう」

彼にはわかっていた。登録する手をへし折れる力と、その手がなぜ伸びてきたのか理解する知能を備えた機械は、普通の労働争議の当事者ではない。

「対象が何を知っているかは重要ではない」と彼は言った。「重要なのは、対象が何者なのかを、ほかに誰が知るかだ」

◆ ◆ ◆

川村の執務室の下にある部屋には、ネットワークの接続口が一つもなかった。

接続口のないものに重要なものなどない、と人は冗談を言う。その冗談が長く生き延びたのは、その部屋が公開された階層図に記載されておらず、冗談を言う人々が一度もそこを訪れたことがないからだった。独立電源、外部通信を行わない光学アーカイブ、手動の空調制御、そして角の革が割れた椅子。設備は三度にわたる省の再編を生き延びた。どの再編でも、アーカイブにある知識はすべて機械可読にせよ、と宣言されていた。

川村は一人で下りていった。

矩形のケースから紙の封印を剝がし、写真を一枚取り出す。画像は鈍い階調の灰色に退色していた。女性がカメラの向こうを見ている。怯えてもいないし、強い関心もない。最初のキャプションで彼女は〈人工対象〉と記載されていた。のちの助成金申請書では〈主任研究者〉。どちらの記載の下にも、同じ名前があった。

レイチェル。

彼女は自分の構造に許された寿命を超えて生きることの結果を理解していた。あるいは、理解していると信じていた。最初の申請は平凡だった。細胞再生試験、移植片の許容データ、解散したメーカーが残した旧式診断仕様へのアクセス。やがて申請は奇妙になった。都市雨水の浄化を専門とする研究所が、神経安定化ハードウェアを調達した。請求名目は膜ろ過工程の位相雑音解析だった。登録されたどの医療処置とも適合しない人工組織の荷が、会社の給水サービス標章しか掲げていない倉庫に運び込まれた。

最初の移管を承認したのは川村自身だった。役に立つ特許群と、国家の監督下なら人工生命の寿命を延長できるという、政治的に都合のよい実証成果を期待していた。ところが手元に残ったのは断片的な報告書の束だけだった。次いで施設から人員が消えた。管理システムは作り直され、現地ログは無

害な保守周期に置き換えられ、研究者たちは実在したかどうかも怪しい身元情報の下、二つの大陸に分散していた。

レイチェルは単に姿を消したのではない。自分を捜す組織の形を理解していた。川村が腹立たしく思ったのはそこだった。

写真の隣に、もう一枚を置く。深圳の民間施設でのスキャンから復元された、古い機械的接合部の画像だ。二つの構造は一致しない。後者のほうが小さく、ずっと巧妙に組み込まれ、接触面は不自然なほど清潔だった。しかし片側に並ぶ開口部の比率は、タイレルの遺産目録に残る図面と一致した。死んだ企業の文法が、製造者登録のない身体へ入り込んでいた。

だからといって、川村は旧企業がその身体を造ったとは結論しなかった。企業は消えても、方法は盗まれたマニュアル、退職した技師、暗号化の甘い保険記録の中に残る。タイレルが残したのは設計だけではない。どの機械とどの機械を決して接続してはならないか、覚えている人間たちも残したのだ。

彼の私的なノートには、八年前に書いた一文があった。〈最も価値のある技術アーカイブとは、アクセスを拒否する手順そのものかもしれない〉。それを省のモデルへ送ったことはない。モデルに渡せば、問題そのものを、別の問題に最適化してしまうからだ。

写真の中のレイチェルは、机の向こうの空白を見ているようだった。

「機材をどこへ置いた？」と川村は尋ねた。

機材と文書は違う。その区別は重要だった。技術仕様書の複製が百部あっても、原本データを認証できる装置が、保管を相続と勘違いした遺族によって隠されていれば役に立たない。タイレル社の資産は訴訟と清算を通じて散逸した。珍しい機器の多くは、実験装置を重量と申告再販価格だけで分類する事務員の手によって目録化された。

二基の診断治具が、ある一つの目録には残っていた。品目名は途中で切れている。以前の所有者の息子が譲渡に異議を唱え、その二基を保有し続けていた。認可を受けたどの機関も、どちらの装置も回収していない。

川村は何年も前に通常の回収部隊を派遣できたはずだった。しなかった。遺産は民間の情報機関に監視されていた。粗雑な捜索を行えば、政府の計算関係省庁にさえ存在を知らせていない何かへ、政府が関心を持っていると宣伝することになる。

いま、深圳のスキャンが、その判断を再び問題にしていた。

彼は二枚の写真をケースに戻した。閉じる前にもう一度、レイチェルの顔を見る。川村の知る限り、彼女が不死を約束したことは一度もない。研究の方向と、通常の劣化曲線に従おうとしない彼女の細胞から、人々がそう推測しただけだった。科学的な可能性は、完成した機械とは違う。しかし一部の集団では、その可能性自体が禁じられた知識になっていた。

彼女に老化を廃絶できるかどうかより、重要な問いが一つあった。国家に何を造ったか知らせることを拒みながら、なぜ国家と戦えるものを造ったのか。

◆ ◆ ◆

深圳セントラルは、市民を分類する政策から八百キロ離れており、その政策を執行する機械からは、まったく離れていなかった。

ロイは市場を下っていった。頭上の天井は、別の天井から捨てられた部材を寄せ集めて造ったように見えた。灰色の水が、三世代分の市政番号を刻んだ配管を鳴らして流れる。修理の露店が柱と柱の間に生き残った床面積を占領していた。通路には、はんだ用フラックス、古い食べ物、潤滑剤、それに人工皮膚の洗浄に使う薬剤の、アンモニアを思わせる精密な匂いが漂っていた。

一人の女性が手を修理していた。その手はまだ男の腕につながっており、男は作業中も読み物から目を上げない。頭上のスキャナーが各関節の一時的な法的身元を列挙していた。いずれにも対応する所有者はいない。部品は、もはや存在しない診療所によってリースされていたからだ。

ロイは触覚神経カプラーの陳列棚の前で足を止めた。それを見分ける方法を学んだ記憶はない。それでも装置ごとの差異は、ひとりでに彼の理解へ浮かんできた。一つは低温耐性を重視したもの。別の一つは電気的な干渉に耐える冗長経路を備える。三つ目は玩具に見えたが、基部に入り込む信号路の数に気づいたとたん、評価が変わった。性能は残る二つを上回るはずだった。なぜそれを知っているのか、露店の商品説明は何も教えてくれない。

売り手が声をかける前に立ち去った。

修理屋の七本指の看板が、細い工房の上に出ていた。網のカーテンの向こうで、両眼を球状の光学機器に換えた人物が、男の肩の内部を検査している。二つの光学眼は同期していなかった。片方は患者の身振りを追い、もう片方は結合ゲルの小さな染みに固定されていた。

「ここへ来いと言われた」とロイは言った。

「誰だってそうだ」と修理屋は答えた。「国家は失敗作を送り込む。市場は借金を送り込む。病院は請求書に書けないものを送り込む」

ロイは研究所で渡された紙片を見せた。

修理屋は動きを止めた。残った手の指で手袋を外し、紙を裏返して細い照明にかざした。裏面に住所はない。偶然にも見える位置関係で並んだ、不規則な三つの穴だけだった。

「誰にもらった？」

「医者だ」

「医者は紙に穴を開けたりしない。署名する」

「なら慎重な医者だったんだろう」

男は愉快でもないのに笑い、紙を返した。

「第二シフトが終わったあとに来い。西側の入口は使うな。それと、何かがおまえを追っているなら、別の場所で振り切ってこい」

ロイは向かいの壁を見た。無許可の神経修理は公共の身元に対する暴行罪に当たる、という警告板の上にカメラが隠されていた。小さなレンズは安物の監視装置とは思えないほど滑らかに動いていた。肩に、まだ起きていない運動への反応が生まれる。通りで同じ先走った動きを押さえたときのように、ロイはそれを抑え込んだ。

「もう何かがついてきている気がする」

「それなら第三シフトのあとだ」

◆ ◆ ◆

川村の回収ユニット二体は、ごく平凡な乗客として深圳へ到着した。

民間用オーバーコートには市政識別子が縫い込まれ、顔は信頼できる公共サービス職員の容貌データベースから選ばれていた。身体のどの部分も安物ではなかったが、顔立ちだけは意図的に記憶に残らない。二体は別々に移動し、移動中は通信しなかった。どちらにも制限された任務パッケージが与えられ、対象が抵抗した場合に追加権限を要求する条件が付いていた。

パッケージはロイを〈高価値の未登録人工個体、構造的制約不明〉と記述していた。破壊的な交戦は明示的に禁止されている。その命令は回収アルゴリズムを苛立たせた。未知の脅威を相手にしながら、対象を保存しなければならないという矛盾を識別していたのだ。二体が矛盾を受け入れたのは、異議を申し立てる能力が任意機能に分類されていたからだった。

修理ギャラリーで、一号機は東側のエスカレーターのそばに位置を取った。周辺カメラからロイの画像を取得し、民間研究所のスキャンと照合する。顔の一致率は低い。動作の一致率は高い。受動測距器は、肩の筋肉が目に見える変化を起こすよりわずかに早く、そのためらいを検知した。

二号機はシャッターの下りたアーケードから接近した。

ロイは姿を見る前に、その二体を感じ取っていた。声でも、ラベルでも、脅威警報でもない。ただ選択肢が狭まっていく感覚だった。露店は片側に混みすぎ、もう片側には空間ができすぎている。中二階の男は人々が不規則に流れていくなかで微動だにしない。階段の下に立つもう一人は、不自然なほど早く目をそらした。

かつて自分が暴力のための道具だったことを、ロイは不愉快なほど鮮明に覚えていた。痛みを押し切って動いたことも、恐怖を抱く者には他人を傷つける権利があると信じたときの、奇妙な壮大さも。しかしコートの下の身体は新しく、獰猛なほど敏感だった。彼が問題に名前をつける前から、保護回路が解決策を準備し始めている。

大部分の買い物客が物音に振り向くより短い時間で、ギャラリーを横切れる。その思考は冷たいほど具体的に浮かんだ。同時に、そんな動きをすれば、ここでは買い戻せない何かを失うとも知っていた。その根拠を言葉にすることはできない。

だから代わりに、電池を一本買った。

露店の主人は意外そうな顔をした。「何に使う？」

「古い何かに」

「それじゃ範囲が広すぎる」

ロイは先に手動交換所で手に入れた紙のクレジット券で支払った。電池は持ち運びに不便なほど重かった。それを保守ゲートで待つ群衆の中へ運び、しゃがんで地面に置く。その動作が上階のユニットから顔を隠し、互いに協力するつもりのない通勤客の列が下階のユニットを遅らせた。

市の作業員が廃棄物用台車を押し出すためゲートを開いた。その隙にロイは通り抜けた。

一号機が向きを変え、予測経路を修正し、二号機に絞った信号を送る。応答はない。ちょうどその瞬間、古い路面電車が高架線をアーケード内へ通過し、アンテナの間を無線の影が遮った。中断は二秒も続かなかった。通信が復帰したとき、対象は消えていた。

派手な電磁妨害兵器など使われていない。あったのは群衆と路面電車と床の電池、それに、人間の習慣で満ちた環境を整然としたグラフのように扱う二体の機械だけだった。

二号機は対象喪失を記録し、〈予想外の移動事象〉に分類した。

ロイはギャラリーの一層下、使用されなくなったポンプ廊下にいた。視野の端にゆっくり展開する診断表示を見る。残量バー、判読できない数値の列、それに、気のせいかと思えるほど小さな〈消費事象〉の印。

戦ってはいない。それでも何かが使われた。

追跡そのものより、その事実のほうが彼を不安にさせた。

◆ ◆ ◆

省に戻った佐伯は、新しい指示を持ってきた。

「国家間事務局が、六年制コアの実演を要求しています」と彼女は言った。「シミュレーションではありません。既存の二十五年製造世代を、立会いのもとで転換する実演です」

「死期を早める実演か」

「安全な終結計画の実演です」

「言葉を変えれば書類の署名者は変わる。起こることは同じだ」

佐伯は、川村が自分を見るまで待った。

「大臣は深圳の異常個体が議論に役立つと考えています。登録制度の外側にいる標本は、対策を急ぐ理由になる」

「大臣はその標本が何なのか知らない」

「あなたもです」

「そのとおりだ」

差し出された覚書を川村は受け取らなかった。〈クラウド支援による法務審査用〉と記されていた。そこに入力したものは、他省庁の認可された分析エンジンから利用できるようになる。〈認可〉は柔軟な言葉だった。政策はすぐに変わる。一度学習したシステムに、知ったことを知らなかった状態へ戻れと説得するのは、ほとんど不可能だった。

「大臣には回収予定を提出する」と川村は言った。「身体構造については一切渡さない」

「受け入れられないでしょう」

「ならば大臣自身が、完全には監査できない最適化ネットワークへ機密研究の記述を放り込もうとしている理由を、同盟者に説明すればいい」

佐伯の人工指が一度だけ強く握られた。もう彼の顔を見ていない。背後の、何も表示されていない壁を見ていた。

「システムが私たちを裏切るとお考えですか」

「裏切りには約束が必要だ。我々のシステムは予測はするが、約束はしない」

佐伯は回答のない覚書を持って去った。

しばらくして、深圳から現場報告が届いた。修理ギャラリー内の短い通信断のあいだに、対象は消失した。死傷者なし。目視で確認できる武力使用なし。通常型のサイバー攻撃の兆候もない。一号機は対象の逃走経路を選ぶには保守設備の配置を事前に知っている必要があると算出した。二号機は、対象は単に自分たちより群衆をよく理解していたのだと示唆した。

川村には二番目の説明のほうが不気味だった。

彼はユニットに距離を保ち、対象の接触先を特定するよう指示した。捕獲は、対象を助けようとしている人物たちのネットワークが描けるまで延期する。私用端末で逃走報告の横に三項目を並べた。消滅した企業。公的には終了したあとも研究を続けた女性。そして、最初の企業が残した文法を使って造られたとしか思えない、出自不明の男の生きている身体。

結論を書く欄に、彼は一語だけ記した。

〈連続性〉。

紙を引き出しに入れ、鍵をかけた。机はその動作を記録しなかった。

◆ ◆ ◆

深圳の地下では、第三シフトの音が第二シフトとは違っていた。客が減り、技術者が増えていた。調整台から細い高周波音が上がる。義指は、いずれの所有者も意識しないような動きを繰り返し練習していた。作業台の人々が使うのはローカルプロセッサー、機械式スイッチの照明、そして現代のネットワークに居場所のない古い計測器だった。

ロイは別の経路から七本指の看板へ戻った。

修理屋は無言で彼を入れた。店の奥には、捨てられた人工皮膚のマトリクス、動かないポンプ筐体、年老いた技師の語彙の中でしか生き残っていないブランドの民生機器が並ぶ細い通路があった。廊下は施錠された昇降機で終わる。修理屋が物理ボタンを順番に押した。後のボタンほど、押す力が必要だった。

「おまえを寄越した医者は」と昇降機が下がりながら修理屋が言った。「おまえのことをよほど気に入っているか、厄介払いしたいか、どちらかだ」

「どっちだ？」

「次に会ったとき本人に聞け」

「どこへ行く？」

「検査したというだけで国際ニュースにならない場所だ」

扉が開いた。闇のなかに、切り離された計器盤の光だけがあった。ガラスの仕切りの向こうで、年老いた技術者が若い女の身体にかがみ込んでいる。女の下顎は整備のため外されていた。彼女の目がロイから修理屋へ移る。怯えていた。だが作業台の上の状況が怖いのではない。

ロイを怖がっていた。

昇降機の音で老人が振り向いた。人工の身体に囲まれて人生のあまりに多くを過ごしたため、ほかの人間が必死に守ろうとする区別には、もう興味がなさそうだった。手は生身で、細い金属の副木で補強されている。顔には深い皺と、右のこめかみに小さな火傷の痕があった。

老人はまずロイの目を見た。次に口元を見た。最後に立ち方の角度を見た。

しばらく、何も起こらなかった。

それから技術者は一歩後退し、作業台につかまった。

「いや」と言った。

ロイは昇降機のそばから動かなかった。

老人は再び彼を見つめた。その顔には、見知らぬ人間の身体に、かつて知っていた傷を見つけた者の表情が浮かんでいた。

「おまえか」と老人は言った。「まだ生きていたのか？」

部屋に一台だけある換気扇が回り続けた。軸受けが不規則に触れ合う音の一つ一つを、ロイは聞き取れた。失われた十一年間が彼の周囲で広がっていく。目覚めて以来初めて、自分の四肢の能力とは無関係な答えを持っていそうな人物の前に立っていた。

「教えてくれ」とロイは言った。「あんたは、いつ俺に会った？」